

連携先世界遺産： 醍醐寺

醍醐寺をより身近に

醍醐寺を今まで以上に身近に感じていただくために、「哲学カフェ」と「醍醐寺放送局(ラジオ)」を企画。

■ 受講生

井上 沙雪（龍谷大学社会学部1年生）、奥東 由己（龍谷大学社会学部1年生）、木村 卓真（龍谷大学社会学部1年生）、木村 勇斗（龍谷大学社会学部1年生）、柴 裕貴（立命館大学経営学部4年生）、財津 優吾（龍谷大学社会学部1年生）、田中 颯祐（龍谷大学社会学部1年生）、檜山 星花（立命館大学政策科学部4年生）、狭間 結衣（京都女子大学現代社会学部3年生）、廣川 凌侍（立命館大学産業社会学部3年生）、南 伊織（龍谷大学社会学部1年生）、村田 大河（龍谷大学社会学部1年生）、吉田 理貴（龍谷大学社会学部1年生）

■ メンター（過年度受講生のうちスタッフとして雇用する者）

富永 燦子（龍谷大学社会学部2年生）、中川 美月（龍谷大学社会学部2年生）、矢作 彩美（京都女子大学文学部4年生）

■ 担当教員

笠井賢紀（龍谷大学社会学部准教授）

活動目的・概要

本科目では取り組む活動のコンセプトとして【もっと身近な醍醐寺】を掲げました。これを実現するために、次ページに紹介する2企画に取り組んでいます。

コンセプトが導かれた背景には、本科目で学んだ知識・方法を用いて醍醐寺の僧侶・職員を中心とする多様な主体から得られた、醍醐寺がさまざまな交流機会を提供していることや、他方で、昨年度の本授業がきっかけとなったカフェが十分に認知・利用されていないのではないかと気がありました。

通年約30回の講義は [I 課題発見 (A方法論修得→B準備→C実践)]、[II 課題解決 (A方法論修得→B準備→C実践)] のステップで構成されており、現在は課題解決の準備というステップです。書くステップを経ることで、思いつきに頼らず丁寧な取材と関係づくりに基づく学びが可能です。



◆ 主な活動

I 課題発見フェーズ

- [A] 第 1～ 7回講義（全体講義含む）
- [B] 第 8～10回講義
- [C] 第11～13回講義（合宿含む）

II 課題解決フェーズ

- [A] 第14～20回講義
- [B] 第21～27回講義（報告会含む）
- [C] 第28～30回講義

※課題解決実践は受講生有志で継続

醍醐寺との主な接点

- 5月13日 開講式@醍醐寺
- 5月28日 全体オリエンテーション
- 6月20日 関係者協議（合宿確認）
- 6月24-25日 醍醐寺合宿
- 7月25日 関係者協議（企画提案）
- 10月27日 関係者協議（企画提案）
- 11月 夜間拝観（受講生各自）



活動の成果

醍醐寺合宿

3年連続となる醍醐寺境内での合宿を今年度も行いました（6月24～25日）。初日は担当教員の基礎講座、各部署（管財、総務、文化財、用度、拝観受付など）に分かれてのグループインタビュー、総務部長の特別講座、僧侶の専門講座と続きます。講座3時間、インタビュー2時間を通じて、醍醐寺の課題の種を探します。

2日目は5時に起床し写経奉納法要ののち、午前中いっぱい3時間半にわたりワークショップを行います。初日にインプットしたさまざまな情報から課題を発見し、その課題に取り組むための事業テーマをグループごとに発表しました。

インタビューやワークショップの方法は合宿に至るまでの各講義で説明・練習しており、その確認の場にもなりました。

次の2企画はいずれも合宿で発表されたテーマを発展させ企画書として醍醐寺に提出したものです。まだ実施には至っていません。

哲学カフェ@ café sous le cerisier

2016年度の本科目では2017年2月23日に「醍醐寺カフェ」を1日実施しました。その後、同じ場所で常設店としてカフェ「café sous le cerisier」がオープンしました。

本年度はこのカフェを舞台として、参加者が気軽に醍醐寺を訪ね、身近なことについて深く考えられる場として「哲学カフェ」を実施したいと思っています。特に親子で参加し、一緒に考えたり話すことで絆が深まるようなテーマ・方法を検討しています。

実施に先立ち、2017年9月20日には龍谷大学のフィールド拠点である「かたつむ邸」（滋賀県栗東市）でのプレ哲学カフェを開催しました。事前の周知が十分ではなく来場者は少なかったですが、テーマの設定、参加者の特性（障がい等）、事前告知の方法など学ぶ点が多くありました。

今後、醍醐寺と協議を重ね、1月か2月に1回と、2月23日（五大力さん）で1回の合計2回、哲学カフェを開催したいと考えています。

醍醐寺放送局(ラジオ)

合宿や講義を通じて、僧侶を含め醍醐寺の方たちのあたたかさを身近に感じました。より多くの人に身近さを感じてもらうため、ラジオを用いたいと考えています。

当初企画では「身近さ」をアピールしたいばかりに、僧侶の個人的なことや醍醐寺への思いを自由に語っていただくような内容も検討していました。しかし、協議を経て、私たちが感じたあたたかさ・身近さはそうした「個人的な趣味・経験や感情の暴露」という点から得られるものではないことに気づかされ、方針を変更しました。

今は、ラジオが音しか伝えられないメディアであることと、真言宗が音を重視する宗派であることに着目し、醍醐寺ならではの音を用いた内容を検討しています。

年度末まで時間がわずかであり、コミュニティFMを用いた放送という当初の計画に間に合うかわかりません。場合によっては、今年度は試行的に、15分から30分程度の番組を録音し、哲学カフェで繰り返し放送するなどの展開も考えていきます。

活動を振り返って

(本コーナーの趣旨は受講生による振り返りと思われませんが、まだ「振り返り」の段階ではないため、教員が書いています。)

本科目では、毎週必ず（どんなに内容が濃くて時間がないときにも）必ず、全受講生が最初と最後に一言ずつしゃべってもらっています（チェックイン・チェックアウトといいます）。最初は緊張していた学生たちも、徐々に時間（30秒）の使い方に慣れてきて、おもしろいことを言って笑わそうとか、「今日は何を言おうかな」とか、「前の人の話につなげてみよう」と楽しみになってきます。

授業で1年間一緒でも、ただ椅子に座っているだけでは連帯感が生まれません。共通の記憶（合宿のたいへんさ）、共通のルーチン（チェックイン）、共通の作業（企画書づくり）といろいろな共通するものを分かち合うのがコミュニティづくりです。

例年、本科目は報告会の時点では企画段階であり事業実施ができていません。そのことは特に問題だとは考えませんが、今年度は例年よりも受講生による醍醐寺への働きかけが薄かったように思います。「これを醍醐寺と一緒にしてみたい」という熱い思いがまずあって、同級生やスタッフや寺が動き出すのだと思いますが、まだなかなかその熱が出ていないのかもしれない。

報告会が終わったら、企画書づくりも醍醐寺への提案も大事ですが、何よりも何度も現場（＝醍醐寺）に足を運んでほしいと願っています。

担当教員からのコメント

本科目は3年度を迎えます。本科目についての論文（笠井賢紀(2017)「地域協働教育によるコミュニティリーダーの育成：京都世界遺産PBL「コミュニティマネジメント特論」を事例として」龍谷大学社会学部『龍谷大学社会学部紀要』50, 50-61）でも述べた通り、この3年間は基本的に同じやり方を続けてきました。

課題発見の方法論にかなりの時間を割くこの方法は、ノリだけではなく信頼関係に基づいた企画構想には欠かせませんが、事業実施が授業期間外になること、前年度の成果をすぐに引き継げないことなどに大きな問題が残ります。次年度から第2フェーズ（次の3年間）が始まるのを機に、【前期は前年度企画の継承】【夏に合宿で課題発見】【後期はオリジナル企画の実施】というような段階を経ることを考えています。

例年のことですが事業実施前なので、プロセスを説明する報告書・プレゼンになっています。

